



これまで耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域の画像診断の成書は数多く出版されているが、本書は Pocket Radiologist シリーズの一環として、従来の書とは全く異なるユニークなスタイルのハンドブックとして刊行された。

その第 1 の特徴は、「頭頸部」の代表的な 100 の疾患（病態）を取り上げて、それぞれ典型的な画像とその所見の呈示にはじまり、その疾患についての「基本事項」、「画像所見」、「鑑別診断」、「病理」、「臨床」、さらに「参考文献」まで網羅されていることである。その情報量は大変多いにもかかわらず、各疾患とも無駄な記述を省いて箇条書きで簡潔に、しかも 3 頁の中に同じスタイルでまとめられているため、読者にとって読みやすいものとなっている。画像診断だけでなく疾患の実用的な解説書としても十分に役に立つ。

第 2 の特徴は、病態の説明のためにフルカラーの 3 次元コンピュータグラフィックスを随所に用いていることである。これは一般の耳鼻咽喉科教科書にもない新鮮なわかりやすい模式図であり、みているだけで楽しく、容易にその病態が理解できるハンドブックとなっている。

第 3 の特徴は、頭頸部の領域の分類法が耳鼻咽喉科の固定概念から脱却していることである。すなわち、領域として「小脳橋角部-内耳道」、「頭蓋底」、「側頭骨」、「眼窩」、「鼻副鼻腔」、「咽頭粘膜間隙」、「リンパ節」、「喉頭」、「口腔」、「咀嚼筋間隙」、「耳下腺間隙」、「頸動脈鞘」、「頸部正中組織間隙」、「臓側間隙」、「小

児病変」に分類されていることで、それぞれの領域に 100 の疾患が振り分けられている。本書をはじめて目にしたとき、読者はこの領域の分類法にとまどわれるであろうが、耳鼻咽喉科医が頭頸部外科という領域に視野を広げていく際に、非常に参考となる実際的な分類法である。今後、放射線科をはじめ、ほかの科が捉えている頭頸部領域の概念を理解し、相互に情報交換をしていくうえでも有用である。

第 4 の特徴として、本書は読者が読みやすいように、見出しの付け方や索引の掲載方法など細部に至るまで様々な工夫がなされていることである。これは実際に本書を手にとってみていけばわかってくる。

以上述べてきたように、本書は単なる画像診断学の教科書ではなく、画像から逆引きできる疾患事典でもある。本来は、放射線診断医のために書かれたハンドブックであるが、その情報はわれわれ臨床医にとっても十分に役に立つものであり、外来の診療机やシャカステンの横に並べておけば心強い味方となる。特に、研修医から専門医試験を受けられるレベルの先生方にお勧めの書であり、さらに経験の豊富な耳鼻咽喉科・頭頸部外科医にとっても、異なった視点からの頭頸部疾患の知識の整理に役に立つものと思われる。

最後に、本書はポケットブックとは思えない情報量の豊富さと値段から考え、コストパフォーマンスのよい本であることを付け加えておく。

（東京医科歯科大学頭頸部外科教授 岸本誠司）